

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
93	滋賀医科大学福祉保健医学講座
<b>題名（原題／訳）</b> Prenatal exposure to binge drinking and cognitive and behavioral outcomes at age 7 years 出生前の胎児における一時多量飲酒曝露が、その後の7歳時の子供の認知と行動に与える影響	
<b>執筆者</b> Bailey BN, Delaney-Black V, Covington CY, et al.	
<b>掲載誌（番号又は発行年月日）</b> Am J Obstet Gynec. 2004;191:1037-43.	
<b>キーワード</b> 多量飲酒曝露、胎児、認知、行動、小児	
<b>要旨</b>  <p>妊娠中における一時の多量飲酒や飲酒総量が、胎児の発育に影響を与えることは知られている。本研究は、胎児におけるアルコール曝露、特に一時に多量にアルコールに曝露されることが出生後7歳児のときに、どのような知的障害をもたらしているか、行動異常をもたらしているかを追跡調査したものである。</p> <p>ある大学の産科に来院した妊婦に飲酒習慣、喫煙習慣、その他薬物使用等の調査を実施した。出産後、子供が7歳になったときに、そのときの家族を探し出し、7歳児にIQテストと行動検査を実施した。ほかにも、学校の先生から情報を集めた。</p> <p>一時多量飲酒（ある機会に5杯以上の飲酒を2週に最低1回）の経験がある母親から生まれた子供は、7歳児のときに評価した知能障害（IQ70未満）がある危険度はそうでない母親から生まれた子供より、1.5倍危険度が高かった。また、臨床的に認識される異常行動を伴っている危険度は2.5倍であった。</p> <p>今まで、飲酒総量が問題にされてきたが、このような一時的な多量飲酒曝露を胎児が浴びるとIQ低下、異常行動児の出生確率が高くなることを示しており、飲酒様態にも注意する必要がある。</p>	